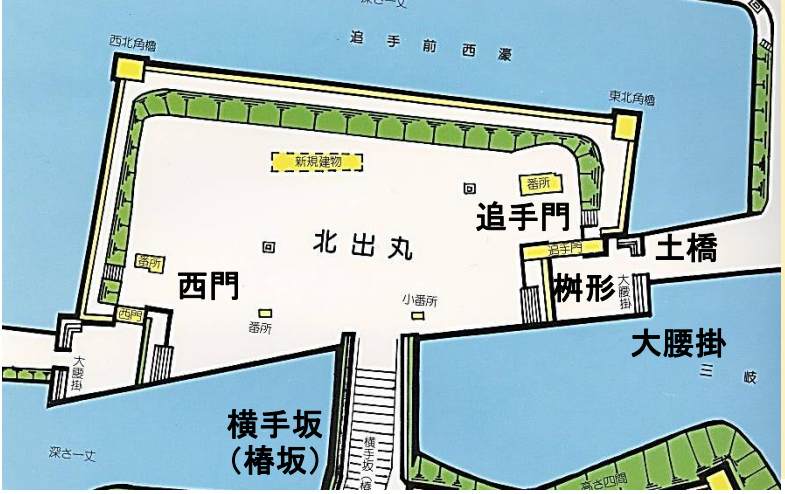
北出丸」は 皆殺し丸」建物はほとんどありませんでした

北の通りから土橋を渡ると第一の門にあたる石垣「大腰掛」があります。その内側は、数を計る一升桝に例え「桝形」と呼ばれる空間があり、右に曲がりと「追（大）手門」がありました。門は黒鉄（くろがね）門と同じく石垣の上にありました。

北出丸には、わざと建物を建てませんでした。それは、敵が侵入すると、門を閉鎖し、内側から一斉射撃をして敵をせん滅し皆殺しにするためのものでした。



降参の旗と開城式

一八六八年九月二十二日、開城は「降参」の旗を午前八時から十時に掲げたことに始まります。『会津戊辰戦争』に十時、薩摩藩の『中村半次郎書簡』には、八時とあります。

開城式は、現在の裁判所東側の甲賀町通中央において、十二時に開始されました。

『会津戊辰戦争』によると、北側は幕を喰い違いに張り、菰が敷かれ、その上に、西側が薄緑の毛氈となり、南から松平容保（かたもり）、十代藩主喜徳、家老の萱野権兵衛、梶原平馬、内藤介右衛門、秋月悌次郎ら計九人が並んで待ちました。東側には、十五尺四方に朱色の毛氈が敷かれ、錦旗を持つ西軍の薩摩藩の中村半次郎、岡藩（大分県）出身の山縣小太郎、御使番の唯九十九が南から並んだのです。

中央には、火鉢と煙草盆が置かれていたという。後に、半次郎らが座った毛氈は、血に染まったように会津藩士らには見えたことから「泣血氈」と呼ばれるようになりました。

開城式が終了すると容保は、『会津戊辰戦史』によると、城中の重臣と将校を前に訣別の意を表し、その後、二ノ丸の空井戸と二ノ丸北側に位置する伏兵郭（梨園）の仮墓地を訪れたのです。そして、「香花を供して礼拝し、諸隊の前に至り、一隊毎に辛勤の労を慰して訣別告げたる」と二ノ丸の戦死者を埋葬した仮墓地に出向き霊を弔っています。

翌二十三日、『会津戊辰戦争』によると、朝、御握りが一個ずつ分配されました。女性と子ども、六十歳以上の老人たちは、「お構いなし」と、どこへ行っても良かったのですが、籠城した男性は、猪苗代での謹慎を命じられました。新島八重は、わざと戦死した弟の名前を付け、山本三郎と称し、男装して人員調を受けたのです。

そして、誰一人女性と疑う者はなく通過し、城を出発しています。途中、米沢藩の雑兵が、八重を見て「ア、女郎が居る、女郎が行く」と叫び、付いてくるので、うるさくて堪らず、隊列の左右に移動しながら、猪苗代まで行っています。

白旗降参は、西洋式のものであり日本で最初に行われたのです。

「降参」の白旗が掲げられた石橋

図・写真・文 ©石田明夫2017 問合せ TEL・Fax 0242-24-3423 090-1378-8087
メール・ホームページ「考古学から見た会津の歴史」で検索